

イギリス詩の研究

圓月勝博

文学研究を生業としていると、愛読という文学の読み方があったことを忘れがちになってしまふ。次に読む本を選ぶとき、話題性のある論文が書ける題材かどうかが最優先事項になっているのである。文学を軽視する近年の成果主義偏重の風潮に対する不満が挨拶代わりになっている今日この頃だが、その不満を口にしてている私たち自身こそ、実は、昨今の文学離れを牽引している主犯なのかもしれないという可能性について、たまには虚心坦懐に思いを巡らしてみる必要があるのかもしれない。

『忘れたくない詩人と詩群・女性「小」^{マイナー}詩人の再評価』という巻名が付された森松健介『ヴィクトリア朝の詩歌』第1巻(音羽書房鶴見書店, 2018.10)は、そんなことを私たちに反省させてくれる書物である。長年にわたって、英文学作品を広く渉猟してきた著者は、愛読するべき「小」^{マイナー}詩人の価値を次々に語って飽くことがない。著者がルビと鉤括弧を併用して、奥歯に物が挟まったような表記を採用していることからわかるように、「小」^{マイナー}詩人という概念を誤解なく伝える適切な日本語はなさそうだ。浅学菲才の私にも言えることは、それが決して蔑称ではないということと、それが「大」^{メジャー}詩人と対になる概念だということである。『「小」^{マイナー}詩とは何か』という1944年の講演の中で、「小」^{マイナー}詩人の定義が困難であるということから話を始めたT.S.エリオットがいつの間にか「大」^{メジャー}詩人ジョン・ミルトンに話題を移しているのは、「大」^{メジャー}詩人あつての「小」^{マイナー}詩人であることを円熟の境地に達した詩人批評家が明晰に認識しているからである。「大」^{メジャー}詩人がいないところには、「小」^{マイナー}詩人もいない。イギリス詩に対する著者の愛情の結晶である上記著作には、いくら敬意を払っても払い過ぎることはないが、「大」^{メジャー}詩人の存在感がすっかり希薄になった今、「小」^{マイナー}詩人の再評価に取り組むことがイギリス詩研究の最優先課題なのかどうかについても、思いを巡らさずにはいられなくなった。

イギリス詩において、「大」^{メジャー}詩人の最高峰と言え、ミルトン嫌いとして知られるエリオット自身が進んで認めたように、ミルトンを措いて他にはいない。本年度、ミルトン研究に注目すべき成果があつたことは、時代に流されない反骨の研究者が未だに健在であることを確認できる喜ばしい契機となった。『ミルトン研究』という銜のない書名が付けられた新井明『新井明選集』第1巻(リトン, 2018.9)に収録されている文章は、一部の談話原稿等を除いてすべて既出の論考で、今さら内容を紹介する必要はないが、日本のミルトン研究を力強く牽引した碩学の足跡を一冊でたどることができる非商業主義的出版物である。同じくミルトン研究に長年にわたって取り組み続け

回顧と展望

てきた孤高の上利政彦も、フィリップ・シドニーからジョン・ドライデンに至る文学批評史という壮大な構えの中にミルトンを位置づけ、『創造の技術——ルネサンス模倣論とミルトン』（九州大学出版会、2018.5）という格調高い研究書を上梓した。読者に媚びない文体で、学術的な議論が威風堂々と展開されている。今や日本のミルトン研究を支える中堅に成長した川島伸博が恩師であった故藤井治彦の気魄溢れる研究を *Osaka Literary Review* 第 57 号（大阪大学大学院英文学談話会、2019.1）の中で回顧する一方、イギリス単身留学から帰国した花田太平が *Samson in Labour: Milton and Early Modern Political Theology*（麗澤大学出版会、2019.2）を引っ提げて、颯爽と登場したことも頼もしい。20 世紀の思想家カール・シュミットの政治神学をめぐる思索に鼓舞されながら、キリスト教詩人ミルトンの著作の政治性を大胆に論じる刺激的な意欲作である。過去の作家の現代的意義を力説する野心的な若手研究者の常として、原典の読みがいささか牽強付会になる個所も散見されるが、本書の瑕疵として目くじらを立てるのではなく、「大」^{メジャー} 詩人の最高峰ミルトンに果敢に挑む新星がさらなる成熟に向かうための新たな出発点と見るべきであろう。

代表作や抜粋を愛読するだけでも真価を味わえる詩人が「小」^{マイナー} 詩人だとするならば、ミルトンのように、その全著作を読まなければその魅力を知ることができない詩人が「大」^{メジャー} 詩人である、と読書の達人エリオットは、上記の講演の中で自説を開陳していた。そして、その両方の特質を兼ね備えた稀有な詩人として、その名前をエリオットが特筆していた詩人がジョージ・ハーバートであった。『田舎牧師——その人物像と信仰生活の規範』（朝日出版社、2018.6）は、山根正弘がハーバートの貴重な散文著作を丁寧に訳出して、近代イギリス宗教詩の最高傑作『寺院』の理解の深化を後進の学徒に託した訳業である。サミュエル・バトラーの傑作長篇風刺詩『ヒューディブラス』（松籟社、2018.9）も、1980 年代に有志が結成したバトラー研究会における輪読の成果を四半世紀の時を隔てて刊行した愛読の記録である。『英語英米文学』第 59 号（中央大学英米文学会、2019.2）に掲載された里麻静夫の論考が取り上げる『国事詩集』と並んで、王政復古期以降の風刺詩を研究する専門家必読の「小」^{マイナー} 詩だが、肝心の 18 世紀イギリス「大」^{メジャー} 詩人に関して、見るべき研究成果の発信がほとんどない状態で、「小」^{マイナー} 詩の邦訳や論考が果たして幅広い読者を見つかることができるかどうか一抹の不安も覚えずにはいられない。

もともと少ない専門家のさらなる減少に歯止めがかからず、切磋琢磨する機会も後継者育成をする場所も失って、瀕死の状態の 18 世紀イギリス詩研究に比べると、伝統ある学会活動を基盤とするロマン派研究は、質量ともに一線を守っている。アルヴィ宮本なほ子が *Odysseus* 第 23 号（東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻、2019.3）に掲載した論考は、「イギリス・ロマン派の詩を読む場所と時間」をめぐって、「大」^{メジャー} 詩人と「小」^{マイナー} 詩人の区別などには一瞥もくれず、惑星の視座から縦横無尽に

イギリス詩の研究

議論を展開して、総合文化研究のあり方を先進的に模索している。脱領域的博学なら、吉川朗子も負けてはいない。19世紀の鉄道から20世紀の自動車へ主役が交代する交通革命に着目して、ツーリズムというロマン派の遺産の変容を語る論考を『イギリス・ロマン派研究』第43号(イギリス・ロマン派学会, 2019.3)に寄せる一方、富士川義之・結城英雄・東雄一郎共編『ノンフィクションの英米文学』(金星堂, 2018.10)にウィリアム・ワーズワスとエドワード・トマスを「英国ネイチャー・ライティングの系譜」として定位する一文を発表して、変わる事のない健筆を示している。詩人研究では、本年は、パーシー・ビッシュ・シェリーをめぐる業績が充実していた。藤田幸広が『チェンチー族——五幕から成る悲劇』(音羽書房鶴見書店, 2018.5)の60年ぶりの新訳を完成する中、『北海道英語英文学』第63号(日本英文学会北海道支部, 2019.1)に掲載された論文の中で、白石治恵が『生の凱旋』の“shape all light”というたった一つのフレーズに徹底的にこだわり抜いて、眼光紙背に徹す愛読作業がもたらす豊穡な世界をひたむきに追求している。本年度屈指の力作論文の一つであろう。ウィリアム・ブレイク、ワーズワス、サミュエル・テイラー・コウルリッジ、バイロン卿、シェリー、ジョン・キーツという6人の「大」^{メジャー}詩人に研究が集中しがちなロマン派研究だが、『人文・自然研究』第13号(一橋大学全学共通教育センター, 2019.3)の江澤美月論文は、出版史の観点からシェリーとリー・ハントの關係に着目し、市川純が『イギリス・ロマン派研究』第43号に発表したヘレン・マライア・ウィリアムズ論と合わせて、ビッグ・シックスの呪縛から自らを解き放つ^{マイナー}としている。綺羅星の如き「大」^{メジャー}詩人研究が堅実に行われている分野なので、「小」^{マイナー}詩人論が発する輝きの希少価値も増す。

それに対して、ヴィクトリア朝イギリス詩の研究に関しては、冒頭で紹介した森松の精力的な「小」^{マイナー}詩人発掘紹介作業以外には特筆すべき成果がなく、「大」^{メジャー}詩人研究不在の状況に寂しさを隠せないが、それを補うかのように、モダニズムの「大」^{メジャー}詩人をめぐっては、手ごたえのある成果が汗牛充棟となった。その筆頭に挙げるべき書物は、木原誠の『イエイツ・コード——詩魂の源流 / 面影の技法』(小鳥遊書房, 2019.1)。原作も映画も一世を風靡した『ダ・ヴィンチ・コード』を思い出させる洒落な書名を記した艶消しモノトーンの洗練された装丁には、書物好きなら思わず嫉妬さえ感じるほどだが、内容も装丁に負けず劣らず魅力的で、「大」^{メジャー}詩人ウィリアム・バトラー・イエイツの全作品を読破した者のみが発見できる詩的暗号を読者に解説してみせるという木原の心意気が全編に充溢している。著者と出版社の会心の協働作業と見た。ロマン派学会の中心人物の一人でもある及川和夫も、イエイツを中心にして、トマス・ムアからパトリック・カヴァナーに至る「小」^{マイナー}詩人にも目配りを怠らない『アイルランド詩とナショナル・アイデンティティ——The Harp & Green』(音羽書房鶴見書店, 2018.4)を上梓して、揺るがぬ存在感を示している。Albion 復刊64号(京

回顧と展望

大英文学会, 2018.11) には, 若手から中堅に順調に成長しつつある西谷茉莉子がイエイツの堅実な作品論を公表している, 世代交代の備えも整いつつある. イエイツと人気を二分するモダニズムの「大」^{メジャー} 詩人と言え、T・S・エリオットに指を折るが、『音楽と絵画で読む T・S・エリオット——「プルフロクその他の観察」から「荒地」へ』(彩流社, 2018.12) を熊谷治子が完成して, エリオット研究に爽やかな新風を吹き込んでくれた. 音楽に造詣が深い新進気鋭の研究者が絵画の世界にも目を向けて, エリオットの初期詩篇をめぐって澁淵たる総合芸術論を展開した研究書である. エリオット初期詩篇については, 実績豊かな北沢格が上述の『英語英米文学』第 59 号に近年の研究動向の進展にも目配りした論考を発表しているので, 新旧世代の研究成果を読み比べてみてもおもしろい. アメリカ文学研究の実績豊かな岡田弥生が『「眼」から「薔薇」へ——F.H. ブラッドリー哲学から読み解く T.S. エリオットの意識の変容』(関西学院大学出版会, 2018.4) を上梓して, アメリカ出身のイギリス詩人エリオットの研究に貴重な刺激を与えている. 倉橋淑子が『サイコアナリティカル英文学論叢』第 39 号(サイコアナリティカル英文学会, 2019.3) に発表した論考は, 岡田が取り組んだ詩人の意識という課題にまったく異なる方法論をとおして肉薄していて, エリオット研究の多面性を再確認させてくれる.

イエイツとエリオット以降のもっとも重要な「大」^{メジャー} 詩人と言え、W・H・オーデンを挙げることに大きな異論はないと思うが, 上述の『ノンフィクションの英米文学』の中で, オーデンの全体像理解の鍵を握るマルクス主義からキリスト教への転回をめぐって, 辻昌宏が新たな視座を提出している. オーデンと同世代の「小」^{マイナー} 詩人としては, 『関東英文学研究』第 11 号(日本英文学会関東支部, 2019 年 1 月)において, 木口圭子が取り上げているスティーヴィー・スミスを忘れるわけにはいかない. 彼女の一撃必殺の名作「手を振っていたんじゃない, 溺れていたんだ」を授業で取り上げると, 「心に刺さりました」と感極まって, 卒業論文のテーマに彼女を選ぶ学生が必ず出てくるが, 素朴なアマチュアリズムを装う彼女の玉石混交の作品群に迷い込んでしまい, 研究案内もまだ整備されていないので, すぐに行き詰ってしまう学生も少なくない. 黙々とスミス研究を続けている木口の仕事は, そのようなイギリス現代詩研究の空白を埋めるものであり, いつの日か信頼できるスミス入門書として集大成されることを期待したい. 「小」^{マイナー} 詩人の紹介としては, 上述の『ノンフィクションの英米文学』に収録された高岸冬詩の現代アイルランド詩人ポール・ダーカン論にも, 学ぶところが多かった. アイルランドのラグビー国際試合を題材とする詩も論じられており, 今年のラグビーワールドカップにおいて, 強豪アイルランドチーム相手に見事な大物食いを演じて, 多くの人々に感動を届けた日本チームの大躍進が脳裏を横切った. イギリス詩研究者も人々の心を揺さぶる大物食いをもう一度目指してみないか.

(同志社大学教授)